

# 「二人称の死」への物語論的アプローチ・その課題と可能性

東京学芸大学 水津嘉克

## 1. 目的

論者は、昨年・一昨年と自死遺児の手記集、関係者・当事者達へのインタビューデータを用いて自死遺児達の死別体験とその後の自己物語のあり方に関して、物語論的な視点から検討を試みた。このことは彼らが他者と分かち合うことが困難な自死による死別という自らの体験をどのように「語り」そして「聴いて」いるのか、という新たな問いへと繋がっていった。今回の発表では、今まで議論してきたなかである意味与件としてきた理論的背景に関して再検討を試みたい。

## 2. 「二人称の死」と「純粋なわれわれ関係」

澤井 (2005) が論じたように、近代以降に生きる我々はある意味で「死」を意味づけられないまま生きている。自らの「死」に関する不可知性は様々なところで論じられており、この問題は V. ジャンケレヴィッチ (1966=1978) のいうところの「一人称の死」の問題であると考えられる。その一方、我々の日常生活のなかは「死」であふれているといってもよい側面を持つ。テレビをつけても新聞を開いてもそこには「死」に関する様々な情報があふれている。このような死の経験のあり方を「三人称の死」と呼ぶことが出来るだろう。われわれは、さまざまな形で「三人称の死」に接しながら生きているといえるが、通常これらの出来事は我々に何も影響を及ぼさない。

我々にとって大きな意味をもつ「死 (死別)」のあり方、それは「二人称の死」に限定されているのである。では「二人称の死」の経験と、他の二つの死の経験の間にどのような違いがあるのであろう。本報告では、この問題をシュッツの「純粋なわれわれ関係」という概念を始点として論じていく。

## 3. 結論

上記のような検討を通じて、我々は改めて「二人称の死」による「死別」の経験にある高い「個別性」の問題へと近づいていくことになる。しかし、それは単に個々人の経験の違いに解消されるものではない。「純粋なわれわれ関係」は「日常生活世界」のなかでつねに更新され維持される重要なものである。だからこそ「二人称の死」の経験そしてそれに続く悲嘆が、その後様々な既存の社会的関係に規定されていくことにも繋がるのである (ex. 家族なのだから同じように悲しめるはずだ)。自死遺児の語りのなかに現れていたように、このことは時に「死別」を語ることを困難にし、その経験を封じ込めることにもなりかねない。

そして「死別」体験に上記のような困難性がともなう時「物語論的アプローチ」が有効な分析枠組みとなり、ピアあるいは分かちあい関係性を議論する際の実践的な論点を提示する可能性が見いだされることになる。

### 【参考文献】

澤井 敦 2005 『死と死別の社会学 社会理論からの接近』 青弓社

Schutz, A 1973 "Collected Papers I: The Problems of Social Reality", =1983 渡部光・那須 壽・西原和久 (訳) 『アルフレッド・シュッツ著作集 第1巻 社会的現実の問題 [I]』, マルジュ社

Vladimir Jankélévitch 1966 "LA MORT" =1978 仲沢紀雄 (訳) 『死』, みすず書房